てなく柳水學人學士やボルカルスト氏やワイクゼル氏ベンサウド氏ハラン氏等も共に賞讃して居るではないか誰れか其效價を疑ふべきや。

## 第八　喘息のアドレナリン療法

▲喘息のアドレナリン療法は一千九百〇三年維也納のアロンゾー氏が初めて發表されて以來喘息の特效藥の如く見做され何人も之を喘息に用ふるようになつた或は内服に或は注射に或は鼻腔に塗布して效を奏した人もある我國に於ては明治三十八年二月中外醫事新聞第五九八號に田中武助氏の報告あり又千葉醫學專門學校雜誌第三十六號に千葉醫學士岩崎由十郎氏が其十八例の實驗報告をされて居る。

▲然しアドレナリンは餘り連續に使用すると動脈硬化症を起したり或は心臟を



害することもあるから其用法に就てはドクトル・エミール・ゼルマン氏の「アドレナリン處方上の注意」と「エルプ氏のアドレナリン注射後の動脈疾患」と云ふ二論文を第五章の其十五岩崎由十郎氏のアドレナリン療法の末項に附記しておいたからそれを參照せられよ。

## 第九　喘息の「ヂウレチン」療法

▲喘息のヂウレチン療法はベールデン氏やバール氏の報告あり我邦に於ては東京醫事新誌第一八〇七號に京都醫學士堀江治吉氏の詳細なる實驗を發表せられた此ヂウレチン療法は余の經驗によれば大に試むべき有效なる治療法である

## 第十　喘息のアトロピネ療法

▲喘息のアトロピネ療法　之れはアドレナリンの如く喘息にはかなり多く用ひらるゝ療法である然し其用法をあやまれば却て發作を強める缺點がある西洋に於てはノールデン氏伯林大學藥物學教室のベルドラム氏同大學のサイヂネル氏等が本療法を賞揚して居る我邦に於ては醫學士和田强氏が近世醫學第三卷第五號に本療法に就き有益なる論文を發表せられて居る。

## 第十一　喘息にモルヒネ療法

▲喘息のモルヒネ療法としてはゴルドシユミツト氏が推奬し我邦に於ては昔からモルヒネを使用するものが多かつたが其中毒の危險あるより大に警戒せねばならぬ而して又モルヒネ療法は無論一時發作をおさへるだけで根治の效はないゴルドシユミツト氏の論文は第五章の其二十一、及其二十二を參照せられたし。



## 第十二　喘息の安息香酸ベンチール療法

▲喘息の安息香酸ベンチール療法としてウオロシン氏は一千九百二十年即ち本年の New york Medical Journal, September. 18, に十四年以來喘息に罹り劇度の發作ある五十四歳の婦人にアドレナリンの注射效なく又モルヒネも極めて大量を使用せねば效がなくなつたものに本療法を施して效があつたと云ふて居る

## 第十三　鼻性喘息のアルコールに依る前篩骨神經切斷療法

▲本療法はキリヤン氏が成功し鈴木篤衞氏も本療法を實驗推賞せられ東北醫學雜誌第一卷第三冊に報告せられた。

## 第十四　喘息の硝酸銀療法

▲ドクトル、サイム氏は一千九百十七年ボストンの醫學雜誌六月三十日に於て一〇%硝酸銀を氣管枝分岐點の氣管枝粘膜に塗布して效果を奏したる八例を報告せられた。

## 第十五　喘息のクロール亞鉛療法

▲フロイデンタール氏は一千九百十六年 New York State Journal of Medicine. December に喘息の原因は氣管枝の肥厚と粘膜の疾病にあるとし之を治療する爲め氣管枝鏡を用ひて患部に〇、五%乃至一、〇%のクロール亞鉛溶液又は薄荷油を混じたる單寧酸液を塗布して效を奏した。



## 第十四　喘息のノヴオカインに依る氣管枝內注射療法

▲ドクトル、ブールジエーア氏はノヴオカイン又はアドレナリンを氣管枝內に注射して效果ありたりとの報告をされたり。

▲レヴイー氏も一千九百十八年本療法を應用して十五人中六人迄成效したと云ふて居る。

## 第十五　喘息の重炭酸ナトリウム療法

▲ドクトル、アイナフブ氏は一千九百十九年三月の Medical Record 誌上に

於て喘息の原因の多數は幽門の勞作不全に原因するものなりとの經驗に基き喘息患者に重炭酸ナトリウムを與へ四百名の患者に效を奏した而して喘息發作の療法として胃管又は吐劑を用ひて胃の內容を排除し灌腸により腸の內容を排泄するを可とすと說かれた。

## 第十六　喘息にワクチン療法

▲ドクトル、ジョースン氏は一千九百二十年二月のロンドン、ランセットに於て細菌性傳染に依つて招來せられたる喘息には「ワクチン」療法を使用すべしと說かれた。

▲シカード氏も一九一七年米國醫學雜誌六月號に其有效なるを發表せれた。

## 第十七　喘息發作に酸素吸入療法



▲醫學士桑山龜雄氏　は臨床月報第八十二號に於て發作の療法に就き詳說せられ喘息發作に酸素吸入法の良好なるを力說せられた。

## 第十八　小兒喘息に麻黃療法

▲醫學士磯部正雄氏　は麻黃に沃度加里を配伍したるものを與へて效果ありし四例を小兒科學會總會に於て講演せられた(兒科雜誌第二〇五號)

▲石野寬吉氏　も研瑤會雜誌第百三十八號に麻黃の有效なるを詳述せられた

## 第十九　小兒喘息に乳酸カルチウム療法

▲醫學士豐田作太郎氏　は近世醫事第二卷第十二號に於て小兒喘息の療法に就て詳說せられコカインの鼻腔內塗布及乳酸カルチウムを持用して效ありと云は

れた。

## 第二十　小兒胸腺喘息にレントゲン療法

▲ルッツアチー氏は小兒胸腺喘息にレントケン療法の有效なりし二例をRevista ospedaliera August. 1915に發表せられた。

## 第二十一　小兒喘息にペプトン療法

▲メーソン氏は一千九百二十年九月のニューヨーク醫學雜誌に於て小兒喘息の療法を詳述し最近佛國及英國に於てはペプトーンの內服及び皮下注射によりて過敏症を制止せられることが發見せられ一日三回ペプトーン五、〇瓦宛內服せしむれば效を奏すと云へどメーソン氏が之を試みたれど確かなる成績を得なかつたと云ふて居る。



## 第二十二　喘息の計數療法

▲ゼンダル氏は喘息發作に際し、一、二、三、四、五と呼氣に於て高聲に數へしめ六と吸氣に於て休み、七、八、九、十、十一と又呼氣に於て數へ十二に於て吸氣を反覆せしめて效ありしと云へり著者も之れを實地に行ふて有效てあつた經驗を持つて居る。

## 第二十三　喘息の食餌療法

▲ドクトル、ゴットリーフ氏は一九二〇年米國醫學會雜誌四月號に或人は牛乳を飲むと喘息が起る之れは牛乳に對して過敏てあるから牛乳を止める、或人

は小麥を食すると發作が起る故にそれを禁ずる、かくして過敏性の食物を攝取せずして喘息發作を豫防するがよいと云ふて居る。

## 第二十四　喘息の理學的療法電氣療法

▲オープルンス氏は一九一四年Die Therapie des prakt. Arzte に於て

(一)理學的療法中發作の抑壓に有效なのは手掌及び足部の熱浴、胸部の芥子泥と壓抵帶、項部の冷水灌腸法濕蒸氣吸入法手巾の薄荷腦滴下等が有效なりと

(二)又輕き發作にはストラモニウム、ベラドンナ、硝石又は阿片を含む薰煙粉、薰煙紙、煙草等を用ふべし。

(三)慢性喘息には毎日十五分宛平流電氣を試むるがよい電導子は頸部若くは胸部背部に置くべし」、と云ふて居る。



## 第二十五　本書編纂者ドクトル高梨鎭の喘息根治療法の概論

▲以上喘息療法の第一より第二十四迄を觀察するに喘息療法の主眼は先づ其根原を探究することである、若し鼻腔の疾病より起つたものなればそれを第一に治療すべし、咽喉氣管の疾病があらばそれを治療する然し發作の際には中々精密なる診察は出來ない故に先づ發作を鎭めねばならぬ故に余は次の如く四項に別ちて述べんと欲する。

A. 喘息の豫防法　B. 喘息發作時の療法　C. 喘息發作の頓挫療法　D. 喘息間歇時の療法。

A. 喘息の豫防方法

一、喘息の人は或特種のものを喰ふと發作するのがある所謂食餌性喘息と云ふのであるから、それを飲食せぬことが必要である、假えば天麩羅を喰ふて發作の起るものはそれを食さぬよふにする。

二、精神作用例之物に驚いたり何にかに興奮すると起る故精神の刺戟をさくるようにする。

三、食物に對して特異質のあるように香氣臭氣に特異質を以て居る人がある假え「スミレ」薔薇の如き香をかくと起るし新蘚なる枯草、馬、兎、猫、繭等の臭氣によつて起る人がある、此の如き人は各其特異の臭氣香氣をさくるがよい

四、小氣管枝の加答兒があつて喘息を起すことがあるからそれを治療せよ。

五、鼻腔とか咽喉に病氣があればそれを治療すること假えば鼻の海綿組織の肥大とか鼻茸とか慢性鼻加答兒等の如くである又咽喉に於ては扁桃腺肥大症の



如きあらばそれを治療するのである。

六、神經病素質のある人には喘息を來たし易いから一般の體質の健康を計ることが必要である即ち苦し空氣の惡い濕氣のある樣な所に住む人は空氣の良い乾燥したる所に居を轉ずることが必要である或喘息患者の所へ往行したが周圍が誠に空氣の惡い煤烟の多い所であつたから注意して清潔なる所に轉住せしめたら比較的に發作が少くなつた事がある、一般に都會生活より田園生活に低地より實地に海岸又は山地に住居する方がよい。

七、癲癇精神病等の遺傳あるものにり起し易いからそれ等の病氣の起らぬ方法を取れよ。

八、皮膚病が喘息を起すことがあるからそれを早く治療するがよい。

九、小兒の重症麻疹百日咳氣管枝炎に喘息を發することがあるから早く治療

する。

十、蓄便が喘息を誘發することがある故下劑又は灌腸によつて排便の方法を取る。

十一、製粉業の如き塵埃を多く吸入する爲め起るものは他の職業を轉するがよい。

十二、僧侶、辨護士、教師の如き音聲を用ゐるものが特別に其爲めに喘息を起すようなれば成るべく他の音聲を發する必要なき職務を取るがよい。

B. 喘息發作時の療法

一、迷走神經を麻痺せしめて氣管枝筋の痙攣を收める法。

(イ)アトロピネ療法 ○、○○○五乃至○、○○一瓦注射。

(ロ)亞硝酸アミール療法 燻煙粉及喘息煙草の如し、



(ハ)ヂウレチン療法 發作の初期に一、○瓦を水にて內用せしむ十乃至十五分にて輕快せないときは更に一、○瓦を與へ尙效なきときは又一、○を與へる

(ニ)ロベリン療法 ロベリア丁幾を十乃至二十滴一回量之を杏仁水沃度加里阿片丁幾を配合して豫防藥として用ひて效がある。

二、氣管枝擴張筋を支配する神經纖維を興奮せしむる爲め。

(イ)アドレナリン療法 一千倍液○、八—一、○注射。

(ロ)アストモリヂン療法 一瓦中にアドレナリン○、○○○八、ピピツイトリン○、○四を含む發作を頓挫する效あり。

(ハ)ピツグランドール療法 一、○瓦を筋肉內に注射す。

(ニ)コフエイン療法 發作中に○、一乃至○、二皮下注射。

(ホ)沃度劑キニーネ療法。

三、呼吸中樞の興奮を制禦するものは次の如くてある。

(イ)モルヒネ療法　バントボン療法。

(ロ)クロラールブロモホルム療法。

(ハ)カルチユーム療法。

▲要之療法の選擇は發作の重輕による即ち輕症は往々呼吸運動の調整殊にゼンゲル氏の計數法にて十分なることがある重症なれば却て其煩惱を增惡せしめることがあるから震動マサージ、燻煙法祛痰劑或は咯嗽劑等を與へ尙止まざるときはアトロピネ、アドレナリン其他の前記療法を用ひモルヒネは最後の抑制劑である。

C.　喘息發作の頓挫療法

一、呼吸運動の調整　ゼンゲル氏の計數法



二　燻煙法　前記の如し。

三、吸入法一名發霧法　吸入罎を携帶し隨的之れを應用するのである、噴霧管を一側の鼻孔に入れ他側を指にて閉ざし氣球を數回壓して深く吸入するのであるストイブリ氏の吸入罎は容積小にして私かに應用し得る便利がある、其吸入藥の處方は左の如くである。

一、アリピン〇、三オイミドリン〇、一五　グリセリン七、〇蒸餾水二五、〇矮松油一滴。

二、ベルバルサム七三、五九、アリピン〇、九四、オイミドリン〇、四七千倍アドレナリン五〇、グリセリン二〇、〇。

三、ストイブリ氏の豫防劑　輕症には千倍アドレナリン液重症には千倍アドレナリン液九、〇と(蒸餾水一〇、〇中に硫酸アトロピン〇、一鹽酸コカ

イン〇、二五を含める液)一、〇〇瓦の混和液を用ふ。

其他の療法としては、

(イ)胸部の芥子泥貼用。

(ロ)鼻腔に鹽酸コカイン鹽化アドレナリン等の液を塗附して鼻腔の腫脹充血狹窄閉塞等を治療するのもよろしい。

(ハ)手巾に薄荷油を滴下すること。

(ニ)濕蒸氣を吸入せしむること。

(ホ)內服藥としては祛痰劑其他安息香酸ナトリウコフエインの如きを與ふることヂウレチンの內服最も可なり。

(ヘ)注射療法としては「モルヒネ」は成る可くは用ひざること若注射の必要あらばアドレナリンと腦下垂體エッキス即ちピツイトリン、ビッグランドールの



如きを注射すること、アドレナリンとピツイトリンの合劑アストモリヂンの如きを可とす然しアストモリヂンは現今容易に店に於て得られず故にアドレナリンを注射し次にピツイトリンを注射せば可なりピツイトリンは得らるべし、若し得らるればビッグランドール、アストモリヂンが最も可なり。

D. 喘息間歇時(即ち喘息患者平素の)の療法

▲喘息發作の起らない平常の時は如何にすべきや之れが極く大切である、即ち此期間に於て喘息の根原を斷ちきる方法を取らねばならぬ假令ば、

一、鼻腔や咽喉や氣管支に病のある人はそれを早く治療してをくのが大切である。

二、胃の幽門勞作不全症のある人はそれを治療せよ。

三、皮膚に濕疹、庠疹、尋麻疹等のある人はそれを早く治せよ。

四、心臟病、腎臟病のある人はそれを治療せよ。

五、腸に寄生蟲のあるか否やを良く檢査して若しあらば寄生蟲を驅除せよ。

六、濕氣のある空氣の惡い所に住することが其人の喘息を起す原因と認めたなれば高燥な空氣の良い地に轉居せよ。

七、一般に體質弱く從て神經質の質の如き人は自家血清療法とか牧野沃度第三マキヨヂンの如き注射法を施して其體質を改良し以て健康體に改造せよ

▲私は喘息根治療法として第一に豫防法第二に喘息發作時の療法第三に喘息發作時の頓挫療法を前に述べ又發作の起らない所謂休止して居る時期には右述べたるが如く喘息の根原を斷ち切る方法を取るのであるが本書第五章の第一より第四十二に至る洋の東西に亙る喘息療法の研究家の經驗を總括略記すれば喘息根治法の大體が明かになる、即ち次の如くである。



一、私の經驗によれば喘息根治の一方法として其人の血液の約五、〇瓦乃至一〇、〇瓦を靜脈管より取りて之れより血清を分離し其〇、五乃至一、二瓦を翌日より三日以內に二回に其本人に逆戻しに皮下注射をしてやる方法即自家血清療法が最も安全にて有效無害の良法であると信ずるそれと共に他の藥劑を與へても他の療法を其に試みて差支ないのみならず却て一層有效である、然し自家血清療法のみで治癒した實例もあるのである喘息患者に「ヂフテリヤ抗毒馬の血清注射や健康なる他人の血清等を注射することが危險であると云ふことは前に詳しく述べたから此には省略する自分の血の注射程安全有效なるものはないのである。

二、沃度療法ボストンのドクトル、レークマン氏は私の推奬する自家血清療法を讃美して居ると共に又沃度療法が有效であると云ふて居るが醫學博士辻寛

治氏や醫學士風間七衛氏獨逸のウエー、スタイネル氏同じくヨハンネス、ワイクゼル氏大分縣の高橋豊三郎氏長崎縣の志下富太郎氏等皆な沃度療法の贊成者である而して何れも沃度の多量極量以上に多量に用ふる方法無論人體に害のないやうにして成るべく多量に用ひんとの望みを以て風間醫學士はコロイド沃度を用ひ獨のスタイネル氏は有機性沃度劑中沃度脂酸結合體の化學的價値の最も重きもの即ち「リポヨヂン」を賞用された沃度脂酸結合體には沃度の含有量が色々異なつて含まれて居るヨヂビンは沃度の含有量一〇乃至二五%サヨヂンは二六%ヨヂヴアルは一七%リポヨヂンは四一、〇六%即ちリポヨヂンは最も沃度の含有量が多くて他の沃度製劑に優越せるが故に之を氣管支喘息及び肺血腫の四十人に試用して豫期せる沃度の效力が顯著に現はれ沃度中毒を起したることなくリポヨヂンの小量を用ひても其效力は沃度加里の大量を與ふるよりも遙に



卓出して居た然も沃度中毒の症狀や胃腸の障害は少しも起らなかつたと云ふて居る。(Deutsch Medicinische wochenschrift 1918, No. 51)

三、牧野沃度第三マキヨヂン療法　之れも亦た其名の現はすが如く私立大日本牧野沃度研究所長牧野千代藏氏創見の牧野沃度第三マキヨヂンの靜脈內注射療法である。此に注意してをくが第一第二マキヨヂンは內服用であつて之れを靜脈內に注射することは決していけない、內用である、第三マキヨヂンはリポヨヂンの如く沃度の含有量は多くして然かも靜脈內注射をして絕對無害で充分沃度の效力を應用し得るのである、第五章の其七に大分縣の高橋豊三郎氏の喘息に牧野沃度第三マキヨヂン療法の治驗記錄は如何に沃度が喘息其他の衰弱せる病者に效價あるものであるかを證明してをる、故に私は沃度は喘息療法の目的と又一には健康增進の目的と生理的狀態を脫出せる所謂薄弱なる病的體質を

改造するの力あるものなるかを信ぜざるを得ないのである。

四、喘息のカルチウム療法　カルチウム即ち石灰療法である、獨逸に於て石灰を製造する所の職工に肺結核患者がないと云ふことを發見して以來石灰が肺結核に有效であろうと云ふ說が起り之を肺結核患者に使用して見たが果して效果あることを確めたので大阪醫科大學の佐多博士は大に之を結核患者に用ひたのである而して今日てはクロールカルチウムとか沃度カルチウムとか云ふものが盛んに結核肺炎其他呼吸器疾患に應用せらるゝ事になつたのである、今私は喘息療法にもカルチウム鹽類を推奬する人を述ぶれば醫學協士有馬賴吉氏はクロルカルチウムを、醫學士竹山九朗氏は沈降炭酸カルチウムを、ドクトルワイクゼル氏は乳酸カルチウムと鹽化カルチウムの合劑を稱揚して居る又小兒科に於ては醫學士豐田作太郎氏は乳酸カルチウムを持用して效ありと云ふて



居る、牧野沃度第三マキヨヂンは靜脈內注射であるが第一、第二マキヨヂンは內用て然かも沃度とカルチウムが主成分てあるから沃度療法の目的と「カルチウム」療法の目的と共に達せられることになるから靜脈內注射を嫌ふものや又注射の出來にくいものには第一、第二、マキヨヂンの內服を推薦するものである。

五、喘息の腦下垂體越幾斯療法　本劑は比較的輓近の製出に係はるもので、「ピツイトリン」「ヒツグランドール」「グランヅイトリン」「フイボフイジン」「バボローン」等種々の製品が販賣せられて居るが要するに腦下垂體の中葉乃至後葉より製出せるもので東西の喘息學者が賞用して居るのは此內「ピツグランドール」と而して「ピツイトリン」と「アドレナリン」との合劑なる「アストモリヂン」と云ふものである、其效力偉大なりと稱用して居るは醫學士柳水學人氏獨逸に於てはドクトル、エル、ボルカルス氏ドクトル、ウアイス氏ドクトル、ヨハ

ンネス、ワイクゼル氏等て佛國にてはベンサウト氏及ハラン氏(Presse medical No. 20. 1918)等である、「ピッグランドール」「アストモリヂン」は目下東京に於て容易に得られぬが「ピッイトリン」は容易に得られるから「アドレナリン」注射と同時に「ピッイトリン」の注射と同時に行へば「アストモリヂン」の注射と同じ效力を發輝することが出來るのである、ドクトルワイス氏が「アストモリヂン」を喘息患者の三千人に使用して無效なりしは僅かに十人て二千九百九十人迄は有效てあつたと云ふて居るではないか。(Die therapie der Gegenwart. 1913.H. 12.)

醫家諸君よ、喘息に惱む人に大に「アストモリヂン」を使用せられよ。

六、喘息の重炭酸ナトリウム(重曹)療法ドクトル、マークアイナッブ氏は喘息の原因を胃の幽門の勞作不全症によると云ふことを實驗しそれに重曹を用ひて效を奏したのが四百名ある。(London Lancett. No. 2. 1920)之れは實に見逃す



ことの出來ない說である喘息患者が抱腹滿腹の時に發作がよく起ると云ふてはないか、過食すると起るのである、それは幽門の勞作不全の爲めに起るのではあるまいが喘息の爲めに苦しむ人は大に此點に就て體驗せられよ。

七、小兒喘息の麻黃療法　醫學士磯部正雄氏石野寬吉氏等は小兒喘息に麻黃を賞用して居る小兒科醫は大に試用せられよ麻黃は實に副作用なき藥である。

八、其他の療法　としてアルコール注射による篩骨神經切斷術、硝酸銀クロール亞鉛ノウオカインを氣管內に注射又は塗布による療法、ヰメーソン氏のペプトン療法、ゴットリーフ氏の食餌療法ルッツアニー氏のレンドゲン療法及理學的電氏的療法や燻煙劑療法等があるし一時的療法としてはアドレナリン注射は一般にやつて居る或紳士は喘息發作每に自身でアドレナリンの皮下注射をやつて居る其他ヂウレチン療法にはペーテルゼン氏バール氏鹽野治吉氏等が贊成

して居るアトロピネ療法にはノールデン氏ベルドラム氏サイヂネル氏醫學士和田强氏等モルヒネ療法にはゴールドシュシット氏安息香酸ベンヂール療法にはウオロシン(一九二〇年)等計數療法にはゼンゲル氏各々其長所を唱導して居る

九、然し本書の編纂者は第一に沃度療法第二にカルチウン療法第三腦下垂體越幾斯療法第四重炭酸ナトリウム療法第四に小兒喘息に麻黃療法第五に燻煙療法第六に食餌療法第七氣候療法第八鑛泉療法第九水治療法第十レンツエン療法等を賞讃するものであるが何れの場合を論ぜず自家血淸療法を共に施したなれば喘息は根治するものである決して不治の疾病にあらずと斷言するものである各喘息患者に就き其病原の精査探求をなし其根源に向ふて鋭刀を入るゝ事の必要なるは云ふまでもないことである。

醫家用
家庭用 **喘息及其最近療法** 終

大正十年一月二十日印刷
大正十年一月三十日發行

正價金壹圓五拾錢

著者兼發行者 千葉縣千葉町九百十八番地 高梨鎭

印刷者 東京市神田區錦町三丁目六番地 鈴木梅太郎

印刷所 東京市芝區愛宕下町三丁目一番地 愛友社

大賣捌所

東京市神田區鍛冶町五番地 誠之堂書店
東京市神田區錦町一ノ一九 有朋堂書店
東京市本郷區龍岡町三十六 根津書店

不許複製

# 通俗高梨醫學叢書

第一編　自家血清療法　近刊
自分の血で自分の難病を癒す新しい注射療法

第二編　喘息及其最近療法　既成　定價金壹圓五拾錢　送料金六錢

第三編　リウマチス及其最近療法　近刊

第四編　腦神經衰弱及其最近療法　近刊

第五編　肋膜炎及其最近療法　近刊

第六編　子宮癌胃癌及其最近療法　既成　定價金五拾錢　送料金四錢

第七編　結核及其最近療法　近刊

第八編　糖尿病及其最近療法　近刊

第九編　慢性胃腸病及其最近療法　近刊

60
701

10.2.23

終